

氏 名	瀬戸 初江
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 記 番 号	第 1 7 号
学位授与年月日	平成 2 9 年 3 月 1 9 日
学位授与の条件	学位規程第 3 条第 3 項該当
学 位 論 文 題 目	循環器疾患患者の患者教育に携わる看護師の 患者教育能力評価尺度の開発
論 文 審 査 委 員	主査 武田 淳子 副査 塩野 悦子, 安齋 由貴子, 萩原 潤

論文の要旨

【目的】

本研究は、循環器疾患患者の患者教育に携わる看護師の患者教育能力評価尺度を開発し、その信頼性・妥当性を検証することを目的とした。

【方法】

本研究の尺度開発のプロセスとして、第 1 段階と第 2 段階を設定した。第 1 段階は、循環器疾患患者の患者教育に必要とされる能力を創出するために、A 県の 300 床以上の循環器科を標榜している急性期の診療施設 3 施設で循環器疾患患者の患者教育に携わっている看護師 14 名を対象にフォーカス・グループインタビュー法を用い質的帰納的に分析した。循環器疾患患者の患者教育に携わる看護師の患者教育能力について、先行文献や専門家よりスーパーバイズを受け尺度の原案を作成した。

第 2 段階は、A 地方の循環器科を標榜している急性期の診療施設の循環器疾患患者の患者教育に携わっている看護師 183 名を対象に、自記式質問紙調査による予備調査を実施し探索的因子分析を行った。尺度の本調査は、全国の循環器疾患患者の患者教育に携わっている看護師 673 名を対象に、質問紙調査を実施し探索的因子分析を行い、同データを用いて確証的因子分析を行った。併存妥当性は、定廣らが開発した看護問題対応行動自己評価尺度を活用し検討した。第 1 段階は、宮城大学看護学部・看護学研究科倫理委員会（承認番号 2012026）、第 2 段階は宮城大学研究倫理専門委員会（宮城大第 753 号）と研究協力施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

第 1 段階の結果から、9 つのカテゴリーと 34 のサブカテゴリーと 53 のコードが得られた。循環器疾患患者の患者教育に携わる看護師の患者教育能力評価尺度の原案 60 項目を作成し、予備調査の結果、探索的因子分析を行い 48 項目とした。併存妥当性の検討では、看護問題対応行動自己評価尺度と作成した尺度との相関係数は $r=0.792$ を示した。信頼性については、全体の Cronbach α 係数は 0.964 であった。本調査は、探索的因子分析で 8 因子構造、48 項目とし、最終的に 41 項目とした。信頼性の検討では、全体の Cronbach α 係数は 0.955 であった。確証的因子分析では、第一次因子として、第Ⅰ因子「患者との良好なコミュニケーションスキル」、第Ⅱ因子「看護過程を展開する能力」、第Ⅲ因子「家族へ対応する能力」、第Ⅳ因子「再発予防を目的に教育する能力」、第Ⅴ因子「患者教育のためのスキル」、第Ⅵ因子「循環器領域の専門性への自己研鑽能力」、第Ⅶ因子「多職種と協働する能力」、第Ⅷ因子「循環器領域の専門知識の習得」の 8 因子構造とした。第二次因子は、「看護師の患者教育能力」の構造モデルを設定し、適合度指数として CFI=0.881, PCFI=0.787, RMSEA=0.06,

AIC=2591.346 が得られた。

【結論】

本尺度は，【患者との良好なコミュニケーションスキル】，【看護過程を展開する能力】，【家族へ対応する能力】，【再発予防を目的に教育する能力】，【患者教育のためのスキル】，【循環器領域の専門性への自己研鑽能力】，【多職種と協働する能力】，【循環器領域の専門知識の習得】の8因子，41項目で構成された。本研究で開発した循環器疾患患者の患者教育に携わる看護師の患者教育能力評価尺度については，一定の信頼性と妥当性が確認された。今後は，循環器疾患患者の患者教育に携わる看護師の患者教育能力評価尺度を活用し，患者教育の自己評価や看護師の教育プログラムの構築へ発展させることが望まれる。

審査結果の要旨

本学位論文の目的は，循環器疾患患者の患者教育に携わる看護師の患者教育能力評価尺度を開発し，その信頼性・妥当性を検証することである。

本研究は，1)循環器疾患患者の患者教育に携わる看護師に必要とされる患者教育能力の明確化及び評価尺度の原案作成，2)患者教育能力評価尺度の開発と信頼性・妥当性の検証，の2段階で実施された。第1段階では，急性期診療施設において循環器疾患患者の患者教育に第一線で携わっている看護師14名を対象として，フォーカス・グループインタビュー法により得られたデータを質的帰納的に分析した後，文献検討ならびに循環器疾患患者の患者教育に関するエキスパートのスーパーバイズを得て，60項目からなる評価尺度原案を作成した。第2段階では，一地方の急性期診療施設において循環器疾患患者の患者教育に携わる看護師183名を対象に，第1段階で作成された評価尺度原案を用いた予備調査を実施し，探索的因子分析と併存妥当性の検討を経て，8因子48項目からなる評価尺度本調査用を作成した。その後，全国の急性期診療施設の看護師673名を対象として本調査を実施し，探索的因子分析を経て8因子41項目からなる評価尺度が作成され，定廣らの看護問題対応行動自己評価尺度との相関係数は $r=0.632$ ，尺度全体の α 係数は0.955と一定の妥当性と信頼性が確認された。さらに本尺度の8因子「患者との良好なコミュニケーションスキル」「看護過程を展開する能力」「家族へ対応する能力」「再発予防を目的に教育する能力」「患者教育のためのスキル」「循環器領域の専門性への自己研鑽能力」「多職種と協働する能力」「循環器領域の専門知識の習得」を第一次因子，看護師の患者教育能力を第二次因子とする二次因子構造モデルを設定し，確証的因子分析により適合度を検討した結果，統計学的に有意な適合指数が得られた。

本研究は，現在，わが国の死因第2位の循環器疾患について，特に急性期診療施設に入院した患者に対しては，短い入院期間中に再発予防に向けた自己管理への動機づけを図ることが優先的教育目標とされている現状において，看護師に求められる患者教育能力そのものに焦点を当てた評価尺度を開発した点に独創性・新規性がある。また今後，本尺度は，循環器疾患患者の患者教育に携わる看護師個人の患者教育能力の自己評価に留まらず，各施設における患者教育の現状把握や患者教育に関する教育プログラムの構築にも寄与するものと考えられた。

この学位論文について2回の対面審査を行い，以下の指摘がなされた。①尺度開発の意義について，急性期診療施設における循環器疾患患者に対する患者教育実施上の課題を含め明解に記述すること，②第1段階（評価尺度の原案作成）について，フォーカス・グループインタビューの実施，文献検討ならびに専門家のスーパーバイズによる検討過程を分かりやすく位置づけて記述すること，③第1段階で明らかになった患者教育能力について，循環器疾患患者が対象であることの特徴を踏まえて考察すること，④考察では，先行研究からの引用と研究者の意見・考えを整理して記述すること，⑤総合考察では，一連の調査結果を振り返り，開発した尺度について適切に記述すること，⑥論文全体に

博士論文要旨・審査結果要旨
学外公表用様式

ついて推敲を重ねること，などであった．その後，上記の指摘事項についての論文修正が確認された．

本学位論文は，救命処置が最優先される急性期診療施設において，循環器疾患患者に対して再発予防に向けた患者教育を実施する看護師に求められる患者教育能力を評価する尺度を開発し，その信頼性・妥当性を検証したものである．開発された評価尺度は，一定の信頼性・妥当性が検証され，新規性，独自性を有するものであり，看護実践における実用可能性ならびに今後の発展性が期待できることから，審査委員会は，博士(看護学)の学位を授与するにふさわしいものであることを認めた．